

月刊

いじろのとも

第四卷

十二月号

善因善果悪因悪果

仏さま	悪なす人には
誰が善なし	悪起こし
悪なすか	善なす人には
雲間の蔭から	善起こす
目をこらし	この世善くなれ
じつと黙って	悪よ滅べよ
見てごねる	

日々是好日

いま
ここに
永遠の
一瞬を
ただ
ひたすら
生きる
日々是好日

生きがいを感じたい人は

このシリーズも最後になりました。一年間に渡り書いて来ましたが、「生きがいを感じたい」と思われた方のご参考になりましたでしょうか。

いつも書きますように、人間は、生まれたからには、あるいは、いま生きていても、いずれ死ななければなりません。ということは、生まれた瞬間から、死に向かって歩みはじめていると言えます。

今年四月号の表紙に「毎日が誕生日」という、次のような詩を載せました。

人間は

今日を生き

今日を死ぬ

だから

毎日毎日が

誕生日

この詩の今日、一日という単位を、一秒にしても同じことです。人間は、今の一秒を生き、今の一秒を死んで

います。仏教では時間の最小単位を刹那と言いますので、刹那を生き、刹那を死んでいると言えるのです。

ですから、つきつめて考えていきますと、人間は生きながら死んでいると言えますし、さらに、言い換えますと、生きることは死ぬことだということにもなります。

そうなりますと、生きがいを感じるということは、死にがいを感じることもだとも言えるのです。死にがいという言葉は普段使いませんので、感じがつかめないかも知れませんが、私の体験ですと、いつ死んでも満足である、ということだと思えます。この世には何も未練がない、何も仕残したことはない、自分の亡き後がどうなるかと気にならない、安んじて、あの世に行ける、ということだと思ふのです。

もし、人間が死ぬときこう思うことが出来るとすれば、死んでも幸せであったということだと思えます。

その心境は次のようなものではないでしょうか。今年十月号の四頁に「みほとけの心」と題し、次頁のような二つの歌を載せました。

こうした、気持ちになることは、とても難しいことだと思いますが、でも、たとえこうした気持ちになれなくても、それを目指して、日々努力することが大切なのです。努力した結果、自分がどれほどそういう気になった

明日の日を	みほとけの
生きるもよし	心のままに
死ぬるもよし	あるならば
ただみほとけの	生きて感謝し
心のままに	死しても感謝す

かなどということをはからわず、「ただひたすら」精進するのです。

人間は誰でもが、その精進を毎日まいにち、死ぬまで続けなければなりません。そうして精進していますと、知らないうちに、右の歌のような気持ちになれるのです。そして、そうなったからといって、生きている間は、常に精進を続けて行かなければなりません。なぜなら、さらに高い境地があるかも知れませんが、知らないうちに心に垢がたまつて、執らわれの心が起こってくるかも知れないからです。生きている限り人間は常に、心を磨き、心身共にバランスを取りながら、死に向かって前進することを運命付けられているのです。

人間はいつかは死にます。それは誰にとつても、明日かも知れませんが、明後日かも知れないのです。年齢によつて多少その確率に差があるだけです。人間は結局、その死ぬときが大切なのです。死ぬとき本当に幸せだつ

たと思つて死ぬる人は、本当に一生が幸せだつたと言えますし、どんなに人生の途中が幸せだと思つていても、最後の最後、死ぬときになつて、いやいや死ねば、その人の一生は不幸であつたと言わなければなりません。

人間の生きがい、つまり死にがいは、どんな地位や名誉や権力を築いたかや、どんなに財産を蓄積したか、などで決まるものではありません。

そんなものをいくら多く達成しても、死にたくないと思ふながら死んだり、死後に自分の達成したものがどうなるのかといったことを気に掛けながら死ねば、その一生は不幸であつたと思います。

こう考えて来ますと、いつ死ぬか分からない人間にとつて幸せであるとは、刹那に生きがいを感じ、刹那に死にがいを感ずることだと言えます。ですから、いまこの一瞬が全てなのです。あらゆる一瞬をあるがままに生きていく。一つの一瞬が、後の一瞬の犠牲であつてはならないのです。いかなる行為を行うのも、そのこと自体を大切に「ただひたすら」行わなければなりません。ということは、自分のすることに満足できないで、いやいやすることは一つでもあつてはならないということです。しかし、こうした心境に至るには、修行がいります。「ただひたすら」な修行がいるのです。

自作詩短歌等選

知って為す

三つ子なら
知らずに出来る
善きことが
何故にできない
知ってる大人

宗教も
知るだけならば
執らわれを
余計に増やす
垢の一つぞ

悪しきこと

為さず善きこと
為したいと
日毎修行に
勤めれば
いつしか無上の
幸せを得む

愚か者

愚か者
賢き者を
愚者と見て
愚かな者を
賢者と見る

業の悲しさ

業多き
人ほど悪を
なしながら
ひとの悪だと
思う悲しさ

自らが

なしし悪には
気付かずに
ひとの悪だと
責める悲しさ
多ければ
多けきほどに
多き悪
生まれながらの
業の悲しさ

坊主でも

背負いし業が
抜けられず
己とひとを
悩ます悲しさ

社会性のバランス

社会性が
アンバランスの人
たてまえ（世間体）は
分かっても
ほんね（こころ）がつい
て
行けない人

徳目

自我没却

慈悲

寛大

とても

いいことばだ

でも

ことばで分かっても

そうないないのが

人間の辛さ

苦しさ

でも

それをめざして

どこまでも

修行しよう

いつか成れるから

永遠のいのち

仏さま

祈るいのちは

永遠で

果てることなく

朽ちることなし

身に宿し

ほとけ磨きて

永遠の

いのち頂く

この有り難さ

行動の社会的意味

人は

自分のなした行動の

社会的意味が

分からない

それを

自分の損得だけで

判断する

他人がなした行動の

意味ですら

自分が巻き込まれれば

自分の損得を

優先させてしまう

でも

気付こう

こんなことをすれば

全体として

社会悪を

増加させていることに

そんなことでは

あらゆる人が

幸せになっっていく

道から

ますます

遠ざかっていることに

自作随筆選

エゴの追求

現代人は、誰でもがエゴを追求したがつています。誰でもが自己の権利を主張したがります。他人の権利を侵しても、自己の権利が保障されることを求めます。自己の義務の遂行は棚に上げて、権利の主張ばかりをしただがります。

それは、個人だけに限られません。個人の集まりのさまざまな水準の集団にも当てはまります。ですから、国家のエゴにも、会社のエゴにも、民族のエゴにも、宗派のエゴにも、主義のエゴにも、家族のエゴにも、みんな当てはまるのです。

でも、皆がエゴを追求しますと、社会の結びつきはだんだんと弱められていきます。

例えば、国際的に見ますと国のエゴが優先し、日本のように飽食暖衣で贅沢三昧の国がある一方で、多くの人が飢えて苦しみ、弱い立場の子どもや老人がどんどんと死んでいっている国もあります。これが、日本の一つの家族の中での出来事だとすれば、とうてい考えられない

ことだと思つのです。

では、そのように団結が強そうに思える家族の中だけに注目してみれば、本当に結びつきが強められているのでしょうか。

決してそうではないように思われます。例えば、家族の結束の強さを表す一つの指標だと思われる、離婚率はだんだん上昇しています。また、シングル指向が進み、結婚しない人が増えています。さらに、結婚しても親と同居する人の数も勿論減っています。いわゆる核家族化は、都市だけではなく田舎にまで及んで来ているのです。それは、個人の一人一人が自己の生き方をそれぞれの場所追求するようになって来たからだと思つのです。極端に言いますと、働く場所も、遊ぶ場所も、休む場所も、憩う場所も、消費する場所も、それぞれが自分の好きなところを求めるようになったことを意味しているように思われます。世間ではこれを価値の多様化と言っていますが、こんなことを「価値」の多様化というのはどうかと思われれます。贅沢に伴う「生活様式」の多様化に過ぎないように思われるのです。ついでですが、価値はますます単純化してきているように思われます。ますます、エゴを追求していくという価値のみになってきているように思つのです。

でも、実はこんなエゴの追求の中には人の幸せはありません。エゴは、基本的に自分が環境を自由にすることを目指しているからです。自分の欲望の限らない満足のために、物的環境だけではなく、人的環境も含めて環境を支配し、自由にしがたっているからです。

しかし、少し考えてみればすぐ分かりますように、人を自由にすることは、自分の子どもでも連れ合いでも、まして親でも、不可能です。封建制度の絶対君主や家長制の家長ならいざ知らず、自分のエゴをむきだして人を自由にしようとすればするほど、人はそれに反抗し、それから逃れ、離れて行きます。

また、たとえ人を自由に出来たとしても、自分の命までも自由にすることはできません。どんなにあがいても、いずれ老いたり、ガンやエイズのような不治の病気に罹ったりして、死んでいかなければならないのです。

さらに、物的環境の天変地変や人災や事故の影響を逃れることもできません。どんなに自分が気をつけていても、飛行機は時々落ちますし、地震も起こりますし、台風も来ます。工事現場から橋桁も落ちてきます。それによつて、自分が自由にしようとしてきた経済的財産も社会的地位も命すらも、なくしてしまわなければならないらしいことも起こるのです。

このように、エゴの追求で自分が自由に出来ると思うことが、自由に出来なければ出来ないほど、人は不幸を強く感じてしまいます。ですから、既に見ましたように人のエゴの追求には必ず限界がある以上、人が自分のエゴを追求しようとすればするほど、逆に不幸になつていくというわけです。

では、人の幸福はどこにあるのでしょうか。それは、自分の自由になる自分の欲望の統制を自由にし、自己の自由にならない自分の外にあることを自由にしようと思わないことです。それに執らわれないことです。そして、自己のエゴの追求と同時に、人のエゴの追求のために自分が犠牲になることが必要であることを知ることです。他者の心の痛みを感じて、それに対応していくことが必要であることを知ることです。自分の心と他者の心のバランスをとることです。

前にあげた例で言えば、自分の命や財産や名譽に執らわれないことです。人的・物的環境を自由にしようと思わないことです。それに執らわれないことです。飢え死んでいる人がいる限り自分は贅沢をしないことです。どこまでも質素に徹し、それで余ったお金を人のために使うことです。それを口で言うだけではなくて、実行することなのです。

インクの異常

最近のドラマの異常さに、暗い気持ちになっていました。例えば、内館牧子作で、昨年NHK朝の連続ドラマだった「晴れたらいいね」の異常さです。ときどき、ニュースの続きなので見ていましたが、その登場人物の殆どの人が異常で、見るたびにあきれていました。私には、登場人物の多くが性的異常者と思ってしまうのです。最近の社会を風刺しているのかと思っていました。その後、内館牧子さんの考え方を書いた雑誌記事に出会い、それがギャグではなく、マジであることを知り、これが今の女性の真実の姿なのかと、驚くやら、悲しくなるやらでした。

また、昨夜も、田向正健作の土曜ドラマ「街角」第二話「覗く青年」を見るとはなしに見ました。途中からは、主演の青年が精神異常ではないかと思ひだし、一生懸命見てしまいました。結局、登場人物すべての人たちの異常さに驚きましたが、作者がそれを自覚しているのかどうか、疑問に思え、とても暗くなりました。

そんな時、今日日曜日（十月三十一日）の朝六時半からのNHKテレビ「旬の人、旬の話」がとてもすがすが

しく感じられ、救われる思いがしました。

それは、弱冠三十二歳の劇作家で演出家である、溝内謙介氏への葛西アナウンサーのインタビューでした。その人は、高校時代から演劇をやり、日本一の賞をもらったそうです。その後、早稲田大学へ進み、続けて演劇をやり、卒業のとき親から会社就職するように言われたが、演劇を職業にするようになったということです。最近、岸田国土戯曲賞（？）をもらったそうで、売れっ子の劇作家で、演出家です。趣味はなく、すべてが演劇につながっているといいます。

「善人会議」という劇団を主宰しているようですが、この善人というのは、演劇を通じて生き方を真面目に考へて行く、という意味が含まれているそうです。

それを聞いて、「ああ、よかった」と思いました。はじめに書きましたように、いま、ドラマがどれもこれも異常に思っていたからです。

世の中もすてたものではない、ということなのでしょう。うか。

（追記）そういえば、山城に居たころ、ふるさとキャラバン隊の「村は3・3・7拍子」というミュージカルを見ましたが、それもとても異常に思えたことを思い出しました。筋が悪すぎました。音楽はよかったです。

釈尊のごとば（十八）

法句経解説

（六六）あさはかな愚人どもは、自己に対して仇敵（かたき）に対するようにふるまう。悪い行ないをして、苦い果実をむすぶ。

自己に対して、かたきに対するように悪い行いをし、その結果、自己に対して悪いことが起こる、という意味ですが、この文章の中には、悪いことを「される自己」と悪い行いを「する自己」との二つの自己が表されています。

人間は三歳ぐらいまでは、自分のする行為を、自分の直観や周囲の雰囲気に基づいて行っています。それを意識して、これは善いことだからしよう、あれは悪いことだからしないでおう、ということはありません。ですから、いつでも自己は統合されていて、この偈にあるようなことはおこりません。

今月号の詩の中に、「三つ子なら／知らずに出来る／善きことが／何故にできない／知ってる大人」というのを載せました。これは、いま述べたことに対応していま

す。三歳の子に刃物を渡して腹が立つたらこれで切り付けてやれと言っても、それを実行する子はいません。それは、相手を刃物で切れば、あの怖い血が出て、痛がることを、自分の体験で知っているからです。自分の痛さはそのまま、相手の痛さでもあるのです。

ところが、だんだん成長するに連れて、ぼくがする、わたしがする、自分でする、といったように自分というものが出来てきます。自己という意識が出来て来るわけです。そうしますと、自分はこうしたいあほしいという意識が生まれます。また、これは善いことで、あれは悪いことだという、判断もだんだん出来るようになるのです。私のモデルで言えば「自我・人格（たましい）」の機能が育つてくるということです。その中心的な働きは、自分の生きる目的や社会のルールに向かつて、自分の行動をコントロールし、自分の精神の働きをモニターすることです。つまり、「こころ」と「からだ」と「あたま」の各水準の働きをコントロールし、モニターするのです。

偈に戻って、「される自己」とはいま述べました「たましい」に当たりますし、「する自己」とは「こころ」と「からだ」と「あたま」に当たっています。そして、そこでなす悪は十善戒で言いますと、不殺生、不偷

盗、不邪淫（以上はからだ）、不妄語、不綺語、不悪口、不両舌（以上はあたま）、不慳貪、不瞋恚、不邪見（以上はこころ）ということになります。こうした悪は、いくら「たましい」の水準でしないでおこうと思っても、つい犯してしまいます。そして、自らが墓穴を掘って、偈で言いますように、苦い果実を結んでしまうのです。

それを逃れるには、三毒と言われます、「こころ」で犯す、不慳貪、不瞋恚、不邪見の三つの戒律を犯さないように、常に、こころを磨いていかなければならないのです。

（六七）もしも或る行為をしたのちに、それを後悔して、顔に涙を流して泣きながら、その報いを受けるならば、その行為をしたことは善くない。

（六八）もしも或る行為をしたのちに、それを後悔しないで、嬉しく喜んで、その報いを受けるならばその行為をしたことは善い。

仏教では、先程述べました三毒が、からまでの悪

い行いを生む根源だと考えられています。その三毒は私のモデルで言いますと、もちろん「こころ」の働きに属しますが、この二つの偈にあります、泣くことや嬉しく喜ぶこともこころの働きに属します。

ということとは、さまざまの悪や善をなす根源も、その行為の評価をするのも、みなこころの働きに属するということになります。

つまり、こころが間違っていれば、行動も間違ったものになり、こころが正しければ、行動も正しくなります。そして、その報いも、また、こころが受けるということになります。間違った行動は、後悔と悲嘆を招き、正しい行動は、歡喜と満足を生みます。

ですから、こころは人間が人間らしく生きる上で、とても大切だということになります。

こんなに大切なこころなのですが、このこころのコントロールは簡単には出来ません。あすから正しくしようと思えば、すぐ出来るというものではないからです。あすから、貪るのをやめよう、怒るのをやめよう、邪な思いを持たないようにしよう、そう思ってもすぐ出来るわけではないからです。

ここに、こころは時間を掛けて磨かなければならない理由が存在するのです。それが、人間が人間らしく生き

る上でとても大切なのです。

(六九) 愚かな者は、悪いことを行なっても、その報いの現れないあいだは、それを蜜のように思いません。しかしその罪の報いの現れたときには、苦悩を受ける。

人間は、自分のところに垢を付けて、それに執らわれませんが、そうなりますと、自分がしていることが正しいか、間違っているのかの判断すら付かなくなってしまう。つまり、正しいと思っただけをやってしまっているのです。解脱するまでは、誰でもところに垢をつけていますので、誰でも垢の多さに応じて、そうしていることになるのです。

そして、こうした自己の執らわれを押し通していきますと、そこに自己満足が得られます。それは、たとえばみれば蜜ということになるのです。その蜜は、実は、苦い蜜なのですが、その苦さにその時は気付けないのです。後になって、だんだんと苦さが身体じゅうに染み渡って始めて気付くのです。

そうならないために、たとえば「在家勤行式」にも懺悔文というのがあります。「我昔所造諸悪業 皆由無始

貪瞋癡 従身語意之所生 一切我今皆懺悔」。毎日、必ず自己反省したいものです。

(七〇) 愚かな者は、たとえ毎月(苦行者の風習にならって一月に一度だけ)茅草(かやくさ)の端につけて(極く少量の)食物を摂るようなことをしても、(その功德は)真理をわきまえた人々の十六分の一にも及ばない。

毎月、一日の間だと思えますが、きわめて少量の食物しか摂らないという行をしても、その行の功德は、真理をわきまえた人と愚かな人では、天地の差がある、ということなのです。この偈は、きわめて厳しい真実を述べています。これは、節食(質素儉約)だけではありません。私がいづもお勧めしています、ヨーガについても言えることです。

行と言いますものは、形は同じことをしても、その内容が大切なのです。愚かな者とは、あたまでではなくて、こころが愚かである者です。自己に執らわれ、自分のなす行為の社会的意味や人の心が分からず、信仰のない者のことです。行は、仏さまを心から信じ、法を信じ、人を信じて、「ただひたすら」行うことが大切なのです。

後記

一、十一月十二日（金）の大雨で、以前崩れたところがまた崩れ、寺から約二百メートルの所から、通れなくなりました。車が閉じ込められ、出るに出不れず、また外部からも入るに入れない状態が九日間続きました。

二、来年一月号から、この「こころのとも」を、コピーから印刷に、大きさもB5からB6変形判に変えます。大阪の、二十八年前からの知り合いの、ユニオン・プレスという出版社の社長さんが作って下さいます。

三、奉仕的にして下さるのですが、外注の印刷費など、いろいろな費用がかさみ、これまでよりもコストが高くなってしまい、購読料を値上げせざるを得ません。申し訳ありませんが、年間、送料込みで、三千五百円にさせて頂きます。

四、皆さま各自の更新時までには、追加料金は頂きません。もし、引き続き、更新して頂ける方は、次回から右の購読料をお振り込み下さい。

五、内容は殆ど変えませんが、一つだけ変わります。それは、読者からのお便り、要望、質問や「詩歌」を載せる欄を一頁作ることです。お便りなどは二百字以内程度にさせて頂きます。質問などで長いときは、こちらで締めさせて頂きます。「詩歌」とは、詩、短歌、俳句、川

柳などです。どうぞ、どしどしご応募下さい。匿名ご希望の方はその旨、お書きください。

六、その欄の名前ですが、「読者とのエコーコミュニケーション」としたいと思っています。この「エコーコミュニケーション」という聞きなれない言葉ですが、これは、エコー（響く）という言葉とコミュニケーション（心を通わす）という言葉の合成語で、私の創作です。私が哲学を始めておそわった大阪経済大学理事長の鈴木亨先生が提唱される響存哲学から思いついたものです。心を響かせあつて心を通わす、というほどの意味です。今は、信義さえ平気で裏切られる時代になっていますので。

月刊 こころのとも	平成五年十二月八日
第四卷 十二月号	〒7771 43 徳島県勝浦郡勝浦町星谷野田尾一二六
(通巻 四十八号)	ひびきのさと 星の岩屋 心光寺 (沙門) 中塚 善成 <small>じょうせい</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 清心者寺院 心光寺 口座番号 徳島9 53708	

